

## ▷ 社会福祉法人はるな郷

戦後、悲惨な状況にあった知的障害者とその家族を支援するため、県立しろがね学園長の登丸福寿（1909-1995 初代郷長）ら有志が集まり、一大県民運動を展開して設立されました。今から約七十年前、昭和33年(1958)のことです。

県民の協力で設立されたことから、はるな郷は「県民立」と言われてきました。現在も、特定の個人や団体が経営するのではなく、はるな郷の職員が中心になって経営している、たいへん珍しい法人です。



# ナンバーワンから オンリーワンへ

社会福祉法人はるな郷の将来構想

(2026. 3. 19)

## ▷ 「老舗」ならではの悩み

はるな郷は、我が国の知的障害者福祉の老舗（しにせ）であり、先駆けであり、大規模法人です。ところが、歴史があつて大きい分だけ、施設も大規模に老朽化してしまっています。ちなみに全国の「老舗法人」は皆、同じような悩みを抱えているそうです。

そろそろ本気で、施設を建て替えなければならない時期が来たようです。ハード面の制約もあつて、時代の新しいニーズにも対応できなくなってきました。

こうしたことから、はるな郷では、今年度、怒涛の勢いで「将来構想」を策定しました。けれども、単なる建替え計画ではありません。福祉を変えてやろう、世界とケンカしてやろうという、福祉の建替え計画なのです。

## ▷ ナンバーワンからオンリーワンへ

では、どんな計画なのか。一言でいえば、はるな郷の在り方を、「ナンバーワン」から「オンリーワン」へ、大改革していこうという計画です。

ナンバーワンには、ナンバー2やナンバー3が存在します。つまり、他に「代わり」がいるということです。しかし、オンリーワンには代わりはいません。唯一無二です。そんな“高み”を本気で目指そうということです。

現在、はるな郷は、既に「ナンバーワン」です。

この業界では、県内最大の社会福祉法人であり、全国的にも大規模法人です。しかも、相談から通所まで、あるいはグループホームから入所施設まで、加えて診療所や調理棟までと、ホームセンターのように幅広い事業を展開していて、規模的な面だけでなく、総合的な面でもナンバーワンと言えます。

こうしたポテンシャルを活用して、誰もできないことに挑戦しよう。そのための新しい施設を整備していこう。そして、はるな郷だからこそできる「ミッション経営」（社会的使命を果たすための力強い経営）を展開していこうじゃないか。——そういう基本方針に立った将来構想です。

## ▷ 建郷の精神へ

では、はるな郷だからこそできるミッション経営とは何か？そして、どのようにして「オンリーワン」になろうというのか？——その問いを解く鍵は、はるな郷のルーツ「建郷の精神」にあります。グラウンドの一角に建つ「建郷の碑」から、一節を引用しましょう。

その灯をもっと下に

灯をもっと下に下げて障害者の取り残しをなくせ 障害が重いからといってこれを避けない  
(建郷の碑より抜粋)

この碑は、法人設立の立役者、登丸福寿と石川薫によって、二十周年（昭和54年）を記念し、「建郷の素志を碑に刻す」として建てられました。

上記メッセージは、正にはるな郷の素志（本懐）であり、法人創設の出発点から、遠く未来に向けて発せられた大切な指針なのです。

## ▷ 「老舗」ならではの強み

今、日本は余裕がなくなっています。人も法人も「守り」の姿勢が目立つようになりしました。余分な負担や責任は負いたくない、という雰囲気蔓延しています。

しかし、大規模法人であるはるな郷は、新しいことにチャレンジする余力が、他よりも比較的あると言えます。さらに、老舗法人なので、長年培ってきた行政との絆もあり、その理解や協力を得やすい立場にあります。つまり、行政と連携して、社会的な課題に挑戦する「強み」を、はるな郷はどこよりも持っていると言えるのです。

この強みを、「建郷の精神」が指し示す方向に向ければ、はるな郷だからこそできるミッション経営と、オンリーワンへの道筋が見えてきます。

すなわち、障害が重い（すなわち、支援する側にとって責任や負担が重い）からといってこれを避けず、決して取り残さない、というミッションを実現するための経営です。例えば、それは、今なら「強度行動障害」や「看取り」などへの対応という難題です。他の法人ではなかなか手が出せず、行政も頭を抱えている社会的な課題です。これこそ、はるな郷だから担えるミッションであり、オンリーワンへの道だということです。



これは、たいへんな難題であり挑戦でもあります。

だからと言って尻込みしては、「老舗はるな郷」「県民立はるな郷」の名が廃ります。

### ▷ 三本の矢

さて、将来構想では、「松之沢サイコー!」、「新天地創造」、「スター誕生」の3つのプロジェクトを計画中です。どれもが創造性あふれ、オンリーワンへの戦略として、申し分なし、と言ったところではないでしょうか。

#### (1) 「松之沢サイコー!」

現在、法人本部のある、榛名山の麓、高崎市箕郷町松之沢の拠点を再興するプロジェクトです。

人里から離れているという欠点がありますが（かといって、それほど負担は感じないというのが、ほとんどの職員の感想ですが）、市街地にはない非常に優れた環境（豊かな自然に囲まれ、広くて自由で、混乱や不安のもととなる社会からの刺激が小さい環境）だという大きな利点があります。この地を、知的障害者を始め、自閉症や強度行動障害者支援の新しい「聖地」にしていこうというプロジェクトです。

## (2) 「新天地創造」

前橋や高崎の市街地に、「福祉の駅」のような地域支援・地域交流のための、新しいタイプの拠点を創設していこうというプロジェクトです。

現在、県と高崎市が共同で、堤が丘飛行場跡地（旧群馬町）を再開発し、日本版シリコンバレーを建設しようという計画が進められています。この壮大な計画に対し、はるな郷は、「知的障害者を未来のだ真ん中へ」と題し、その未来都市の中心に「拠点」を設けさせてほしいと、いち早く提案しているところです。これも、新天地創造プロジェクトの一貫であり、誰も思い付かなかった、大胆な発想です。

## (3) 「スター誕生」

全く新しい発想で、「福祉の未来」を創造していこうというプロジェクトです。若い人が集まり、福祉事業の「星」を生みだし、ゆくゆくは、福祉や起業の国際的アワードの受賞まで目指していこうという、夢と野心があふれる企画です。令和8年度には、一億円で「はるな郷イノベーション基金」を創設し、若手職員の挑戦を応援する計画です。

### ▷ はるな郷が構想する「将来」とは「未来」とは？

現在、国連などの勧告によって、我が国も地域移行（＝脱施設）の必要性が叫ばれています。我々も全面的に賛成です。が、欧米の実態を調べてみると、やはり理想と現実には、相当のギャップがあるようです。そのギャップに、障害者とその家族を落とし込んではいけません。安易に考えて、欧米の後を追いかけては危険です。

日本には日本の、長年培ってきた「福祉の形」があるはずです。これを生かしながら、欧米の轍を踏まず、欧米の先を行かなければならないと考えます。「欧米は先進国、日本は後進国」という見方を脱する必要があります。日本には日本の、はるな郷にははるな郷の良さがあり、美しさがあるのです。



利用者と共に生きる全ての人の幸せを目指して

咲き誇るはるな郷

はるな郷は、欧米に挑戦しようと思います。それは、決して大それたことではありません。灯をもっと下にさげ、障害者の取り残しをなくせばよいのです。障害が重いからといってこれを避けなければよいのです。すなわち、建郷の精神に立ち返り、「はるな郷」を取り戻せばよいのです。

はるな郷から、福祉を変えて行きましょう。——日本の？ いえ、世界です。